



TITLE:

[研究報告2] 渚の灰から微笑み返し : 2004年スマトラ島沖地震津波と社会の再生

AUTHOR(S):

西, 芳実

CITATION:

西, 芳実. [研究報告2] 渚の灰から微笑み返し : 2004年スマトラ島沖地震津波と社会の再生. CIAS discussion paper No.50 : 世界のジャスティス --地域の揺らぎが未来を照らす-- 2015, 50: 13-19

ISSUE DATE:

2015-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228627>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

渚の灰から微笑み返し

2004年スマトラ島沖地震津波と社会の再生

西 芳実

京都大学地域研究統合情報センター・准教授

1. アチェの震災

私は未曾有の災害で多くを失ったはずの被災者が微笑んでいるというところから、非常に大きな災厄に見舞われた人たちが被災後をどのように生きようとしているのか、それをどのように理解したらよいのかということについて考えていきたいと思います。事例とするのは、2004年にインドネシアのスマトラ島沖で起きた、スマトラ島地震津波の最大の被災地となったインドネシア、アチェ州です。ここはスマトラ島の西北部に位置しています。面積およそ5万8000平方キロ、人口約430万人の地域です。面積はだいたい東北地方6県と同じぐらい、人口は日本の半分ぐらいになります。この地域に2004年12月26日にマグニチュード9.1という地震が起き、その地震の結果起った津波が押し寄せ、この地域だけで死者、行方不明者は、17万3000人、住居を失った人は50万人に及ぶという大規模な災害が起きました。私たちにあって身近な東日本大震災ですと、同様の面積、人口が倍のところで死者、行方不明者が2万人ですから、それと比べても非常に大きな被害を受けた地域であったということがわかるかと思います。こうした未曾有の災害に対して、世界中が関心を寄せました。100年に1度といわれる非常に大きな規模の地震であったこと、そしてスマトラ島沿岸部に達した津波の高さは10メートルという、これも非常に大きな規模の災害であったこと。そしてこの津波はインドネシアだけではなく、インド洋沿岸諸国に大きな被害をもたらして、全体としては死者、行方不明者22万人を超え、被災国だけでも十数カ国に及び、さらに欧米や日本人などの観光客も被災したということで、大きな関心を集めました。

そして、なかでも最も大きな被災地となったインドネシア、アチェ州には大規模かつ国際的な救援復興活動が行われることになりました。この地域にはインドネシアの内外から多数の支援者が入域し、さまざまな復興支援事業が行われていきます。こうしたなかでアチェは突然国際支援の実験

場とも言われるような状況になります。支援のため、あるいは報道のため、さらには調査のために現地入りした人々のなかから聞こえてきたのが、「どうも自分たちが持っていた被災者像と違う状況がある。これはなぜだろうか」ということでした。たとえば被災者たちの表情を撮影しようとしたメディアの人たちが、彼ら／彼女らが思いのほか明るい表情をしていて絵にならないという声があったり、あるいは避難キャンプで配偶者を失った人たちが次々と再婚していくという状況に驚いたり。あるいは支援者の人たちから出てきた声としては、自分たちが住宅を供与したにもかかわらず、それをありがとうとうれしそうに受けとってくれるかと思ったらそれだけでもなくて、ここをこういうふうにしてほしい、ああいうふうにしてほしいといった注文がつけられる。あるいは、支援を始めたころには、あなたがくれた家に住みますと言っていた人たちが、実際に住宅をもらいうけても、その家に住んでくれないといったような状況があるといったことです。このために報道の人からは絵にならないと言われたり、支援者たちからはどうもほかの地域の被災者たちと違うような気がする、というような声が聞こえたりしました。今日はそのなかでも特に被災者たちが思いのほか明るい表情をしていた、被災者たちが微笑んでいる、支援者たちに対して微笑みを寄せているということの意味を考えていきたいと思います。

2. 微笑む被災者たち

微笑む被災者の例としては、たとえばこんな写真があります。(写真1) これは被災から1周年したときに被災地で行われた津波縁日の様子です。被災した人たちが被災した様子をその図画にしたポスターを見て、笑いながら選んでいる。どれにしようかなと選んでいたりと、被災の様子を描いたボードを背景に記念撮影をしていたりする光景が見られました。こういった情景を見たときに、被



写真 1

災地に入った人たちは、どうしてこの人たちは微笑んでいるのだろうかという疑問を持たざるを得なかったわけです。これに対してどういうふうに考えるかということは、とりも直さず私たちがこの地域の人たちをどのように理解しているのかということを反映するものです。

考え方としては、人ってそういうもので、自分自身は被災を経験していないからわからないけれど、自分も同じ経験をすればわかるのかもしれない、あるいはこのアチェという地域はイスラム教の信仰心が強いから、神を信じているからこそ心が強く、このような災厄にも耐えることができるんだ、というような考え方があるかもしれません。文化が違うから自分とは違うけど、そういう人もいないかもしれないというような受け止め方です。

あるいは、なぜ怒らないのかというような受け止め方があるでしょう。津波は予測ができるもので、あらかじめきちんとした避難指示が出ていれば、こんなに大きな災害にはならなかったはずだと、当然考えてしかるべきだ。そのように考えれば、被災後に政府の対応を批判する、あるいは、科学者の対応を批判するというようなあり方があるはずなのに、そういったこともせずに微笑んでいる、という受け止め方です。これに対しては、たとえば、そういう知識がないからなのかもしれない、あるいはインドネシアという国はまだ制度が遅れているので、その程度にしか対応できないのかもしれない。あるいは、意識が低いというような捉え方をすることもあります。

このように、アチェの被災と復興の現場は、まさに異なる文化の人々が協働している場で、さまざまな疑問が生じていた現場になっていました。これは地域の姿と課題を読み解く、またとない機会であると言えるかと思います。そして同時に、目の前で展開している事象が理解できないという

ことは、取りも直さず、自分自身の見目が問われているということです。自分自身を知る機会にもなっているように思います。そのような意識を持ちながら、この状況をどういうふうに理解していったらよいのかというのを考えてみたいと思います。

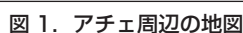
読み解きの手掛かりの1つは、被災後だけではなく、被災前のその社会の姿があると思います。アチェは、この未曾有の自然災害を被る前に、30年に及ぶ内戦下にありました。もう1つは、地域のかたちを見るということです。このアチェという地域の歴史をさかのぼって、何が起こっていたのかというのを俯瞰して見てみますと、実はアチェというのは、外部世界とのつながりが自立を支える社会であったということがわかってきます。こうした理解を踏まえるとどうなるか。そしてさらに、目の前で微笑んでいる人がいるときに、実はその微笑んでいる人は、ほかにもさまざまなかたちで情報を発信しており、そのメッセージをうまく読み解くことによって、その裏にある思いというのを読み解けるのではないかということを念頭におきながら、被災後のアチェ、あるいは、被災前のアチェについてたどっていきたいと思います。

3. 内戦状態からの被災

まず、被災前、そしてその地域のかたちを見てみたいと思います。先ほど申し上げたように、このアチェという地域は、被災前に30年に及ぶ内戦が続けられていました。1976年に、アチェ独立運動が始まります。これは、インドネシアの一部であるアチェは独立した国家になるべきだと主張するもので、アチェ独立を主張するGAMと、この独立を認めようとしないインドネシア政府、そしてインドネシア国軍のあいだで、内戦状態になっていました。2003年からは軍事戒厳令が施行され、その結果として、外国からの人道支援、あるいは、メディア関係者も現地への立ち入りというのを制限されるような状況になっていました。いわば、2003年以降のアチェというのは、外部世界から何が起きているかよく見えない状況にあったということです。そういった外部とのつながりを断たれた状況のなかで、この地域では、インドネシア国軍とGAMという2つの軍事勢力による抗争が続けられていました。一般の人々にとっては、目の前に特定の軍事勢力が来ると、その人たちは必

さらに内戦は、経済生活や身の安全を脅かすだけでなく、社会内部にもさまざまな困難をもたらしました。そうした困難のなかでも、象徴的で非常に大きなものとして挙げられるのが、死者の弔いに伴う困難です。日常的に2つに分かれて敵対する勢力があるなかで、アチェでしばしば見られたのが、誰がやったのかわからない匿名の暴力でした。この結果として、日々の生活のなかで、行方不明者であるとか、身元不明の遺体といったものが、身近に現れるということがありました。そして、自分の家族が行方不明になったとしても、なぜ死んだのか、なぜ行方不明になったのか問うことができない状況にありました。これは、亡くなった人がいるということ認めることや、なぜ亡くなったのかと問うことは、一方の勢力に加担

そういった状況のなかで、被災者たちが支援者たちに微笑みを向けていたということの意味を考えるのであれば、この微笑みもまた外からやってきた人たちに対して、自分たちが生きているとい



うことを示すという上で、選び取られた表情であると言えるように思います。同時にそれは、被災前にアチェが外部世界から完全に遮断された状況のなかで、内部が大きく2つに分かれて抗争していたという状況に変わる新しい状況が、被災後に生まれることへの強い期待を表していたようにも思います。

4. 地域のかたちを読む

このように被災後には、世界の関心がアチェに向けられ、世界から人々がアチェに現地入りし、大規模な救援復興活動が始まりました。世界からやってきた人々に対して微笑むアチェの人たちを理解しようとするときに、微笑んでいるその人そのものではなく、町の周りの様子などに目を向けてみると、またその理解も変わってくるように思います。被災直後には旗というかたちで示されましたが、その後もアチェの町のなかに、さまざまなかたちで、人々が発しているメッセージの痕跡をたどれます。たとえば写真3は、津波で内陸の3キロの地点まで流された発電船の模型です。発電船のある集落の入り口に置かれていて、発電船を一目見ようとやってくる人たちの目印になっています。外から支援にやってきた人たちは、こんな内陸まで津波が押し寄せてきたのだ、という風に、被害の大きさを感じ取ろうと、発電船を探しにくるわけです。被災直後でガイドや道案内もないときに、被災地の人たちが、ほら、ここにあなたたちが求めている発電船がありますよと、作ったものです。大変な状況のなかでこういったものを作って、外の人たちの関心を引くと同時に、非常に精巧に作られた模型は、一種ユーモアさえ感じられるように思います。

あるいは、写真4は村落の入り口に建てられた

ゲートです。インドネシアでは、集落ごとに入口にゲートが作られていて、インドネシアの独立記念日の8月17日になると、そこにそれぞれ思いの意匠を凝らして装飾が施されます。これは被災して最初に迎えた独立記念日のときに建てられたゲートですが、よく見ると、上にインドネシア語で文字が書かれています。そこには、「たとえ家が壊れようとも、たとえテントで寝起きしようとも、2005年8月17日、インドネシア共和国独立60周年記念」という文字を読むことができます。インドネシアのほかの地域では、ごく普通に8月17日を独立記念日として祝うことができますけれども、自分たちは住む家すらまだ建つ見通しもないという状況のなかで、8月17日が来た。お祝いをしますが、まだ私たちはテントにいるんですよと、自分たちの逆境を、むしろ笑いに变えて、道行く人々に向け発せられているメッセージです。社会のなかで共有して、この被災を受け止めようとする心意気のようなものが感じられるように思います。

図2は、被災から1年ほどたったときに、地元の新報に掲載された3コマ漫画です。政府の役人に案内された外国のドナーがアチェに来ると、役人は津波の惨劇がわかるような、絵になる被災地を案内するのですが、漫画の主人公ガムチャントイは、仮設住宅にさえまだ入れずにテントで避難する人々のところに案内しています。これは、被災者たちが自分たちの置かれた状況を実に客観的に捉えた上で、自分で笑ってみせるというたくましさを示しているように思います。

図3も同様に、被災から1年たったころに地元紙に掲載された、アチェの様子を視察しにきた大統領に向けてられた1コマです。これは読者からの投稿として掲載されたものです。大統領の顔写真とともに、「お帰りに気をつけて、このたびの大統領のアチェご訪問は、今なお仮設住宅暮らしの私



図3. 発電船の写真



写真4. ゲートの写真

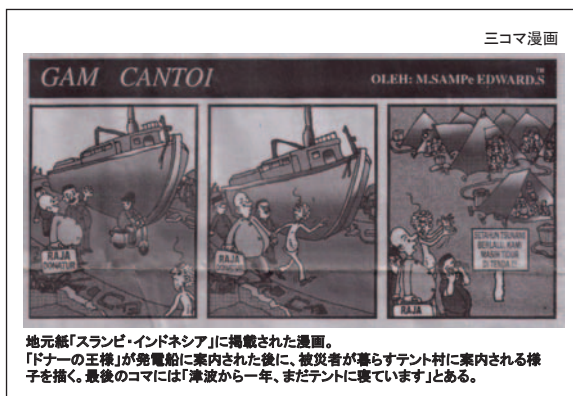


図 2. 3 コマ漫画



図 3

たちにとって、神のお恵みでした」とあります。お帰りに気をつけてという温かいメッセージと同時に、半日の儀礼的な訪問でアチェを立ち去ることができる大統領に対して、自分たちはアチェから逃げることもできず、避難生活を余儀なくされているという強烈な皮肉をかましながら、機知に富んだ言い回しで伝えるという工夫が見られます。

このような状況を見ていきますと、アチェの人々が被災直後から思いのほか明るい表情をしていたということの意味も、もう少しいろいろと広げて、深めて考えることができるように思います。長年にわたって紛争に苦しんできたアチェの人々にとっては、被災は、もちろんそれによって失われたもの、痛み等あるわけですが、一方で、被災によって新しい関係が切り開かれる、そういった契機になるのではないかという強い期待を寄せるものもありました。その表れとして、思いのほか明るい表情があったのではないかということです。アチェの人々が、今こそ外部世界とのつながりを修復し、回復しようとしているという強い思いがあったように思います。

旗や人々の微笑み、集落のゲートや漫画というものを改めて考えてみると、これらは、いずれ

も必ず誰かしらに向けられたメッセージで、そのメッセージを受け取る相手に応じて、さまざまな工夫が凝らされていたように思います。外部世界の歓心を買うために笑ってみせるといった単純なものではなく、素直な喜びもあると同時に、割り切れなさもあるけれども外の人々とのつながりを維持したい、ずっと継続的に続けてきたいという強い期待を抱えている。そういったなかで、相手に応じて表現方法を巧みに変えて、メッセージを発していたと思うからです。その意図をどこまで外部の人がくみ取るかは、もちろんその受け手しだいですが、いずれにしてもこれらの試みが、失われていた関係をつなぎ直し、育むための営みであると理解するのは、間違っていないように思います。

5. 死者と生者へのメッセージ

ではこうしたメッセージというものは、単にこれから生きていくためだけに、あるいは今生き残った人たちが外の世界とつながっていくためだけに発せられたのでしょうか。いや、そうではないということ、最後に見ておきたいと思います。メッセージは、生きてこの世にある人だけに向けられているわけではありません。最後に亡くなった人たちとの関係をどのように考えていたのか、見てみたいと思います。

写真5は、ある海岸に非常に近い津波被災地の光景です。ここには住宅街が広がっていたのですが、津波によってすべて流されて、集落の7割以上の方々が亡くなっています。ここには、トルコが支援を行いました。非常にきれいな赤い屋根の復興住宅で、地元でも理想の復興住宅というふうに報道されたほど、評判のよい住宅でした。ただし入居者は非常に少なく、空き家が多く、支援の



写真 5. 津波被災地の光景

事業としては、評価が分かれるプロジェクトになっていました。こうしたなかで1つ目を引いたのが、このオレンジ色、黄色の建物です。これは復興住宅を改造して作られたものです。海岸のすぐ近くに建てられた店で、「サフィラ」という屋号が付けられています。2つに分かれていて、左は食料品店、右は服屋になっています。こんなところになんで土産物屋があるのかと、人々は不思議に思います。売られている品物も、見ればわかるように、町でも買うことができるような子供服です。海岸沿いのリゾートだから、水着とかタオルとかビーチサンダルとかがあるならともかく、いずれも町なかで売られているような品々で、特に大人の女性向けのイスラム教徒の服が並んでいます。反対側にはお菓子屋さんがあって、小さな子供が喜びそうなパッケージの商品が並んでいます。なぜこんなところにお土産物屋があるのか。店のなかの様子をもう少し詳しく伺ってみると、奥のほうに写真が置かれています。そこには、「2004年12月26日に津波の犠牲になった私たちの一人娘、サフィラ」という文字が記されています。このように考えると、建物名がサフィラとあるところからもわかるように、津波によって失った娘サフィラを思って建てられたものであるとわかります。いわば、サフィラちゃんのために建てられたお墓のようなもので、これらの服も、おそらく彼女が一生かけて身に着けるはずだった洋服であるという思いが込められているのかなと思うことができます。こちら側のお菓子屋さんも、たぶん彼女に食べさせてあげたかったお菓子を売っていると考え、このサフィラという土産物屋をこの地に作った家族、遺族の思いがわかるように思います。

あるいは、写真6は、集団埋葬地のゲートの言葉です。アチェの首都であるバンダ・アチェ周辺には、およそ10ヵ所の集団埋葬地があり、そこには10万近くの人たちが埋葬されています。そういった集団埋葬地のゲートの1つに書かれている言葉なんですが、ここにはこのようにあります。「命あるすべての者たちよ、われらはおまえたちを試している。良いことと悪いことには、より試練として。そしておまえたちはいつか、われらのいるところに戻されるのだ。」これは、集団埋葬地のほうを背にして、集団埋葬地の外の道路のほうに向けて読めるよう設置されています。この言葉自体は、イスラム教の聖典であるコーランの言葉ですが、同時にインドネシア語で書かれていることから、インドネシアの被災した人たち、バンダ・アチェでこれから生きていく人たちに向けて発せられて



写真 6. 集団埋葬地のゲートの言葉

いるように読めます。そして背にしているのが、埋葬地のほうであることを考えると、これは、津波によって先に命を落とした人たちが、生き残った人たちに向けて発しているメッセージとして設置されている。それを設置したのは生き残った人たちにほかならないわけですから、生き残った人々が犠牲者を思いながら、これからの人生をどう生きるかを表明し、さらにそれを人々と共有しようとする決意の表明であるように思います。

6. 私たちの物差し自体が問われている

このように被災前の社会の課題を踏まえてみていきますと、アチェの被災後の人々の生き方、アチェの災害対応で大きな課題となっていたのは、1つは、外部世界とのつながりをいかに確かに、豊かに確保するかであり、もう1つは、死者さえ弔えないような社会内部の深刻な亀裂をどのようなかたちで修復するのかということであったと考えられます。集落のゲートですとか、漫画ですとか、集団埋葬地の言葉、あるいは人々の微笑みなど、単に被災者としてこれらの人々の行動を理解しようとしたときには違和感を覚えるようなことであっても、実は、人々がさまざまなかたちでそれぞれの相手に向けてメッセージを発し、対話の場を作ることによって、社会、断絶してしまったさまざまな亀裂を修復し、新しい社会を作っていくとする営みとして理解できるように思います。そしてもちろん、こういった多くの人々に向けての対話や、隣人との共有だけでは解消されない、個人個人が抱える大きな痛みなどもあります。それはサフィラと屋号のついた土産物屋のように、それぞれの人々がさまざまなかたちで、個人個人、あるいは家族のなかで痛みや苦しみや亀裂をひっ

そりと抱きしめ、乗り越えよう、受け止めていこうとする営みも、あったということを忘れてはならないように思います。そしてまた、この復興住宅の改造というのは、さきほどの土産物屋、復興住宅を改造したものですから、支援の基準からすると裏切りや逸脱と捉えられるのですが、実はそこにこそ、個人個人が社会と共有できないなかで、なんとか解消しよう、受けとめようとする思いが込められていると理解できると思います。

私たちは他者を理解するときに、さまざまな基準を当てはめ、その意味を読み取ろうとします。そして読み取った意味に基づいて、対応を考えようとします。支援や報道や調査のために訪れた人々が、被災者と接するときに微笑んでいるということ、単に元気な人たちだな、たくましいなと思う、あるいは、変わっているなと思うにとどまるのか、あるいは、さらに一歩踏みこんでメッセージをよりじっくりと読みとこうとするのかという分岐点においては、私たちの物差し自体が問われているのではないのでしょうか。ずれている、あるいは違うと思うところにこそ人々の思いがある。そして、そこにこそ、対話の糸口があるというふうに考えますと、被災した人たちが私たちに向けた微笑みに、私たち自身がどのように微笑み返すか、ということこそが問われていたように思います。

その意味で被災者の微笑みというのは、私を含め、研究や支援や報道のために入った人たちのものを見る枠組みを問うものですし、その意味をより掘り下げて理解しようとするならば、目の前にある自分自身の関心、あるいは、目の前にすぐ見えているものだけを見るのではなくて、その周辺のもの、今の時間よりもう少し前の時間などに目を向けていくことによって、今日お話ししたような別の理解が生まれてくるのではないかと思います。そしてそれは、出会った関係をその場しのぎのものにせず、長い関わりのなかにおいて意味づけていくということにとって必要な営みのように思います。